

広島俳句倶楽部

令和六年七月作品集

ふるさと 港町 吳

綾乃

私は、母の地元 吳市の港町、阿賀で生まれました。父は転勤族で、吳に落ち着いたのは中学入学時。それまでは、広島、山口、松山、高松と四国を転々としていました。見知らぬ地で、知らぬ校歌を歌い、吳弁も通じず、人とのつながりを作っては別れるというのは複雑でした。子供心に「ふるさと」という言葉も浮き草のような感じがし、盆正月に母の実家で祖父母たちに会ったのが安らぎでした。就職を機に広島市内に住み、クレアラインを運転して身内や友人に会い、町も変わり人も年を経るなかで、私の心のふるさととはやはり吳の思いが強く残っていたある日、灰ヶ峰に登ると、吳、広島や、島々、遠くは四国まで見渡せ、ふるさとが第二、第三とあると思うのも良いように感じました。

故郷は燕の空の広がりて

「灰ヶ峰鏡と仰ぎ」四十の夏

新緑の灰ヶ峰より里を見る

青き嶺登れば望め安芸と伊予

夏豆を毫る祖父母と妹と

汲み取りのホース跳び越え夏休み

篠笛にそつと口寄す祭の夜

子の羽織る吾の振袖盆の夜

父母が吾子に持たせる大きちぬ

磯の香の濃くも甘やか牡蠣打ち場

《作品鑑賞》

大畑 恵

綾乃さんは中学の時代までお父様の転勤で色々の土地を回られたとの事。大変だったと思いますが、それぞれの土地で新しい経験ができ、新しいお友達ができる、少しくらいやましい気が致します。盆正月にお母さんの実家で過ごされた日が楽しかったのでしょうか。

汲み取りのホース跳び越え夏休み

一寸お転婆な女の子が目に浮かびます。

灰ヶ峰に登った時の句は、山の景色の美しさが伝わります。

「灰ヶ峰鏡と仰ぎ」四十の夏

灰ヶ峰は故郷の吳、広島、瀬戸の島々、四国まで望める。それぞれの地が綾乃さんにとって色々な思い出に繋がるのでしょうか。他の灰ヶ峰の句もとても臨場感があり、山を知らない私も目に情景が浮かびます。

私が微笑ましく読ませて頂いたのは、

子の羽織る吾の振袖盆の夜

お母さんの振袖を着て一寸得意げな娘さんと、それを見つめる綾乃さんの姿が浮かびます。

父母が吾子に持たせる大きちぬ

一番大きいちぬを選び、子に持たせようとしているご両親の姿が目に浮かびます。

故郷に繋がる思いと人との繋がりを大切にされている綾乃さんの句を鑑賞させて頂き、ほのぼのとした思いになりました。

刑部に輕部に茅花流しかな

夏潮を眼下にせしか児嶋止倉

青芝や大山までの道思ふ

忍冬や牛馬は人に連れられし

芍薬や牛馬の道は今もなほ

数々の神や仏や金銀花

栗咲いて牛馬も人も上り坂

人知れず代田ありけり二三枚

梅雨近き牛馬の道へ山騒ぐ

出水川牛馬の道に轟けり

朝焼の高速道を走りたる

谷に沿ひ雲上りゆく夏の朝

夜の明けて鳥の声する草清水

谷筋に道の名残や時計草

柿の花散らばつてゐる坂の道

青梅雨の社に参る朝かな

梅雨寒の柏手響く社かな

露残る森に聞きけり時鳥

斑猫の跳ねたる砂の白さかな

車寿なり汗拭く母の笑ひたる

夕暮を枝垂るるままに残花かな

近寄れば雀隠れを雀出て

その下に人の声するハンカチの花

里山を映して植田二反かな

二つ三つ摘んで桑の実口に入れ

風吹いてふと袖に着く花櫛

やや弱き雨降つてゐる山法師

何ゆえに光青むや松葉菊

青空の下どこまでも青景山

木の蔭に休んでをれば夏燕

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

明けの空低く飛びたる夏燕

緑蔭のベンチに友と長話

窓拭いて瓶に紫陽花挿しにけり

ほろほろと山鳩鳴いて梅雨晴間

初蟬の厨に立てば鳴き出しぬ

吾が一句貝風鈴に吊しけり

擦れ違ふ人の香水ほんのりと

走り来る子供に抜かれ蟬の坂

朝曇背山に鴉の声激し

日焼してますます父に似てきたり

鳥声に振り返りたる夏の夕

黒猫が前を横切る夏の夕

夏の夕校舎に鴉一羽居て

合歓の花傾ぎて揺るる夕間暮

鉛筆を走らせる音夏の雨

グロリオサフェンスを越えて開く梅雨

休みなく夏木の雀鳴いてをり

信子待ち夏木の中の鳥探す

廃院の塀際の百合上を向き

おくるみの頭の見えて夕涼し

義父眠るしづけさに咲き梔子は

詩の中へうづめる恋や蚯蚓鳴く

初蟬や馬関を越えて一人旅

烏賊釣り火御霊の如く輝けり

夏雨に濡るる浴衣のしをらしき

夏の朝酒氣の残れる小倉かな

颯爽と歩めり滝の近づけば

ほの光る恩師の墓よ夏の雨

安芸灘の岬に立てば南吹く

噴水や日々ささやかに緑る句集

あざみ

亜矢

綾乃

犬連れと行き逢ふ海辺風薫る

緑さす川辺に出でて雀鳴く

六月の波止場の風に吹かれをり

紫陽花の朝に母の骨納む

絶え間なき鳥声を聞く夏至の園

雀飛び夏蝶飛んで草の原

夏の野のベンチに妻と犬の居て

初蟬を枯山水の庭に聞く

暮れてゆく日浦山へと月涼し

万緑や墓石に母の名を刻す

白鷺の狙うて降るる浅瀬かな

夾竹桃子どもの声が響きをり

片蔭に色取り取りのヘルメット

蟬の声空に青さの戻りたり

スカート白がひらめく夏木立

滝壺へゆつたり落つる笹の舟

朝焼に昨日も来たる小鳩かな

夕立や稲稈頭濡るるほど

イヤホンに遠雷届く夜半かな

停電の夜は懐かし蚊遣かな

老鷺の声病室にとどきけり

藻の花の富士の流れに咲いてをり

縁側で祖母と編みたる螢籠

段々の田圃に舞へる螢かな

百合の花今年も咲くと便りせり

万緑や点滴台を手に眺む

古民家の窓辺に飾り水中花

万緑や土佐路を急ぎ父母のもと

夏草の中を参りし父母の墓

川霧の向うに聞いて杜鵑

井藤希

栄吉

大畑恵

傘さして夏越萩の百段を

ふたところ梔子香る散歩道

降り止みてまた降り出せる半夏かな

荒梅雨の雨音を聞く夜更けかな

山ほみにまた押し寄せる蟬しぐれ

向日葵や乗換駅に海を見て

籐筵に足投げ出せり里帰り

夕焼の海へと川は蛇行して

夏萩やきざはし濡るる奥の院

その刻のまた来る朝広島忌

暁子

ほととぎす朝日の中に声しきり

咲き満ちて背丈まちまち玄葵

風に乗り匂うて来たる笹百合よ

夏休みの約束をして子は去りぬ

荒梅雨に外周りのもの片付くる

夏暁の鳥声を聞く窓辺かな

手の甲の水滴光る夏の朝

夜濯に去りし子のシャツ混じりて

切株に座さうとすれば糸蜻蛉

万緑の真つ只中の道郷へ

すみれ

蟬時雨の真中に一人立ってをり

湖までを片手で払ふ夏蓬

いつまでも蟻を見る子を見てゐたり

汗だくの男の子真白き歯で笑ふ

下るたび舟虫増ゆる磯の道

蟹の子を追ひかけてみる午下がり

真夜中の登山小屋より歩き出す

汗拭ひ山の挨拶交はしたり

音も無く水湧き出でて苔の花

黄菅咲き木橋に風の吹きはしむ

知佳子

母が家に行けば燕も来てをりぬ

幼子が緑雨の中で傘回す

公園から我が家に匂ふ権の花

故郷の田まで河鵜の来てをりぬ

母が家の前の川土手螢待つ

夏出水日にちの経ちて里に入る

田草取子はあちらから進み来る

車止め目と耳で蚊を探しをり

幼子と縁に火花を並べたり

向日葵の咲く床屋へと夫の行く

ちどり

蓮華蹴躑咲く丘霧鐘撞いてみる

春蟬の山荘去る日來りけり

郭公や蓼科山に雲あらず

今年竹木曾福島へ道下る

紫陽花の碧色が良し雨頻り

雨蛙吾が掌を跳びにけり

木斛の花や昨日も今日も雨

黒南風や流水ここに留まりて

と志さんの好きな文字摺草咲けり

青葉して鴉の声に威嚇され

辻純江

お向いの花蘇芳へと人の寄る

外苑の一つ景タゴを見上げをり

卯波寄す稲佐の浜に立つてをり

病み上がりの娘と歩く梅雨晴間

梅洗ふたつぷりその香吸ひ込んで

景の奥に初生リトマト見えてをり

万緑や生き長らへて傘寿なり

木々揺らす風と歩いて夏の夕

炭燗ぐ母思ひ出す古团扇

家居して袖下抜くる風涼し

雲雀

森林の本日のアイステイミント
到着の時刻は変わりなく青田
右手にはチケット日傘に空青し
ハンモック親子離れて揺れており
人間に関心もなく花の蜂
ラベンダー畑にピンクのドアが開く
磨かれたガラスのビルに夕立雲
アクセルを締める粒夕立雲
遠雷によその洗濯物を見る
一瞬のUFOのごと目雷

ふじ女

青芝に寝て見上げたる空に雲
螢かな外湯の前に夫待てば
青梅雨や灯りの漏るる駐在所
短夜や父の介護はまだ続く
緑蔭の境内を抜け父母の墓
木下闇しだいに沢が近くなる
吊橋の下は急流さみだるる
一輪が薄暮に落ちて沙羅の花
残照に聞こえてきたる河鹿笛
湯治場の裸電球星涼し

松田裕子

新樹光ダム湖の朝の閑かなり
緑さすダム放水の水煙に
緑蔭の日の斑に遊ぶ雀かな
朱の社殿抜けて波間へ黒揚羽
日の斑揺るツリーハウスのバルコニー
書き留むる一日の歩数一夜酒
町興し職員はみなアロハシャツ
背ナの汗後ろ手に搔く鯨尺
良く焼いたレバーが好きで冷し酒
玫瑰や石碑は海に向いて立ち

森口良樹

木道の端に迫りて水芭蕉

水口を開ければ早し水すまし

明易の北の浜辺に人動く

女坂日陰を蟻の横切りぬ

一夜酒まづ仏壇に供へけり

青景木菟遠く聞きをり祖母の家

夏見舞小樽のガラスペン使ひ

川蜻蛉堰の暗きを飛びにけり

山盛の枝豆つまみ宿題す

山野ウタ

初蟬の麓に下りて聞こえたり

ひとしきり鳴いて熊蟬宮へ飛ぶ

万緑に束ねた髪を解きけり

苔の花水琴窟の音響く

すれ違ふ子等の歓声揚花火

満潮の島を照らして夏の月

熊谷ゆり子

緑蔭に眠る子を置く乳母車

朝の日に花びら透くる蓮かな

花びらの細かくふるへ朝の蓮

高く咲く蓮に朝風通りけり

白蓮の静かに崩れ真昼かな

とめどなくとめどなく散り百日紅

桑門わかこ

丘の上羊の群へ春の風

ろばの背に吾子跨るや春の風

芍薬の深く散る午後刻

荒れた田に白鷺一羽来てとまる

夏つばめをスケッチしたき鞆の浦

山々に霧広がりにて空昇る

土肥律子

浴衣の子びよんびよんびよんと跳ねて行く

縁側に並んで食ぶる西瓜かな

遠雷や米研ぐ指に力入る

こめかみから頬を伝はり汗の落つ

朝涼の六郷用水散葉す

露涼し犬に引かれて草に入る

撫子

ゆつたりと動きを止めぬ揚羽蝶

緑濃き山を分ちて夫婦滝

登り来て滝の飛沫を顔に受く

ぎしぎしの続く棚田の休耕田

慰霊碑に祈る人あり夾竹桃

大原良子

雨止んで初蟬を聞く夕べかな

とりどりの紫陽花の色不思議なり

鉄線の蔓の宙へと自在なり

客待ちでラジオオラスの黄色汚ゆ

梅雨湿り熱中症にまゐりたり

朝市の間口半間烏賊並ぶ

扇風機持つて部屋から部屋移る

垣根越えこぼれ落ちさう令歎の花

緑蔭の乗馬見てゐる小淵沢

顔はどのダリア客待つ玄関に

時忘れオカリナ吹けば汗流る

阿弥陀寺に蟻一匹の雨宿り

坊守の集ひの昼に茗荷汁

息をつめ団扇もとまる土俵かな

朝顔を提ぐる夫婦とすれ違ふ

紀英子

須美れい

高嶋絹代

新緑に声高らかな小鳥かな

中背の我より高く立葵

山雀の庭の青景の枝に居て

夏の日の嚴島へと船揺れて

上島康子

石段を数へて上る紫陽花寺

李の実漬けてしばらく眺めをり

あちこちに古墳の標令歎いて

川蟹と遊ぶ少年梅雨の冷え

高梨英子

とりあえず茅の輪をくぐり夏迎え

くちなしの花の香りに子を思う

螢見に結局行かぬままとなる

あの鳥が四十雀だと知ると増え

今

梅雨最中靴を濡らして子が燥ぐ

久々の友と帰郷の青田風

朝採りの胡瓜塩つけ齧りをり

そそくさと夕餉を済ませ遠花火

みさ子

バス待ちて見上ぐる先に夏の雲

炎天の水平線に船の見ゆ

夕風の瀬戸の山々暮れてゆく

焼茄子の冷えし頃には父帰る

美耶

亡き友の軒に布巾や南吹く

回り道して其処此処に梅雨茸

車窓よりきらめく波の青田かな

朝夕に麦茶いっぱい沸かす日々

やす保

紫陽花の色に見とれて立ち止まる

夏期講習百日草をキャンパスに

河原静子

テント張り平和の祈り原爆忌

鳩は舞ひ平和の祈り原爆忌

民

令和六年六月度作品集より

雲雀 私の選んだ十句

根雨に着き畳む日傘や古道終へ
夏草を踏み分けてゆく水辺かな
薔薇の棘雨の雫を落としたる
山上湖巡りさびたの花に会ふ
梅雨の月友と別れしあとの道
一匙の夫の最期のメロンかな
青嵐大樹に沿うて下りてゆく
下野草祖母の小庭に今も咲き
腰高に田を植うる子の腕白し
明易し眠れぬままの雨の音

佐保 光俊
高尾 ひとみ
井 藤 希
す み れ
松 田 裕 子
高 梨 英 子
美 耶
桑 門 わかこ
み さ 子
や す 保

森口良樹 私の選んだ十句

根雨に着き畳む日傘や古道終へ
白南風を受け甲板に立つてをり
花吹雪瞬きもせず見つめをり
白波の竜骨洗ふ夏の海
合歓の花里の道まで枝伸ばし
波音にいつしか慣れて午睡かな
海霧消えて風車の並ぶ岬かな
芋焼酎十八番の歌を先越され
短夜や水ひと息に飲み干せり
靴紐を結び直せる夏の宿

佐保 光俊
村 上 正 人
高尾 ひとみ
栄 吉
大 畑 恵
暁 子
松 田 裕 子
高 梨 英 子
撫 子
熊谷 ゆり 子